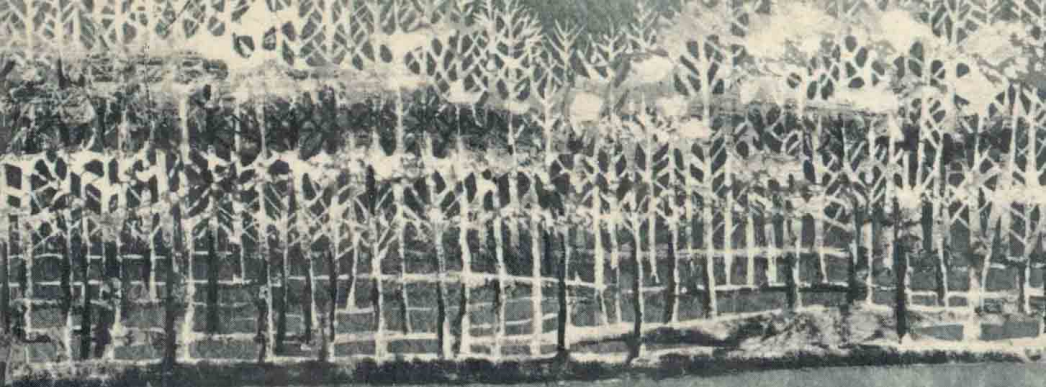




朱鷺の墓

— 風花の章 —

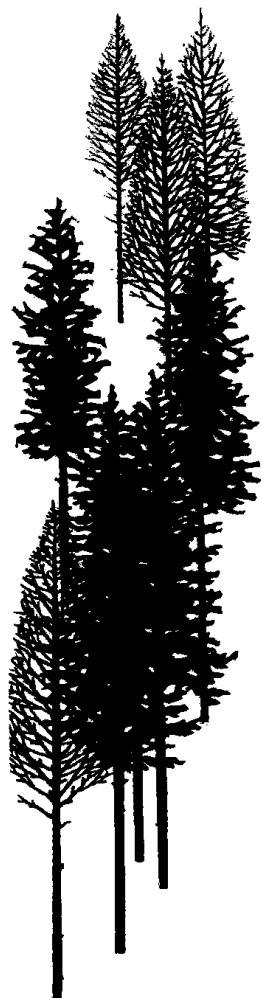
五木寛之



鷺^{さぎ}の墓

— 風花の章 —

五木寛之



新潮社

© 1971 Hiroyuki Itsuki, Printed in Japan

朱鷺とぎの墓はか
——風花かざはなの章しょう——

昭和四十六年四月二十五日印刷
昭和四十六年四月三十日發行
著者・五木寬之いつき ひろゆき

發行者・佐藤亮一

發行所・株式會社新潮社

郵便番号・一六二

東京都新宿区矢來町七一

電話・東京(03)二六〇・一一一一

振替・東京八〇八

塚田印刷株式會社

大口製本

定価五〇〇円

落丁乱丁本はお取替えします

朱鷺の墓

— 風花の章 —

へ近來不良ノ徒、各地ヲ徘徊シ、甘言ヲモツテ海外ノ事情ニウトキ婦女ヲ誘惑シ、ツイニ種々ノ方法ニヨリテ海外ニ渡航セシメ、渡航ノ後ハ正業ニツカシムルコトヲナサズ、却ツテ、コレヲ強迫シテ醜業ヲ営マシメ、モシクハ多少ノ金錢ヲムサボリテ他人ニ交付スル者アリ、コレガタメ海外ニオイテ、イウニ忍ビザルノ困難ニ陥ル婦女オイオイ増加シ、在外公館ニオイテ救護ヲ努ムトイエドモ、アルイハ遠隔ノ地ニアリテソノ所在ヲ知ルニ由ナク困難ニ陥レル婦女モマタ種々ノ障碍ノタメニソノ事情ヲ出訴スルコト能ワザル者多シ、ヨツテ、コレヲ誘惑渡航ノ途ヲ杜絶シ、カツ婦女ヲシテミダリニ渡航ヲ企図セシメザルヨウ取計ウベシ

——外務省訓令第一号——

染乃は二階の窓にもたれて、たそがれのせまった街のたたずまいを、ぼんやり眺めていた。あたりには薄紫色の、ぼんやりした霧が低く流れている。ふだんはけばけばしい街並みが、その霧を通して見ると、芝居の書割りのように一種なまめかしい風情をたたえて見えるのだった。

シベリア大陸の裏玄関ともいえるウラジヴォストークの街が、一年中で最も爽やかな季節である。五月から六月へかけて、北国の春がたちまち夏へ素晴らしい早さで移り変わる時期だった。

へポブラの葉の綺麗なこと——

染乃はうっとりとして街路樹の風にひるがえる若葉に見入った。植えて間もないポブラの若木は、まだ弱々しい小さな葉しかつけていない。その柔らかなそうな若葉が、油を塗ったようにつやつやと光って、夕陽の中にひるがえっている。

へあの並木を植えた年に、私はここへきたのだ——

染乃はある感慨をもって、一列に並んでいる細いポブラの木々を眺めた。松原屋の主人に連れられて、船で日本海を渡り、このウラジヴォストークの街へ連れて来られてから、いつの間にか三年の月日が過ぎていく。その時、一緒に内地からやってきた娘たちの中で、今もこの街に残って働いているのは、染乃をふくめても三人しかない。すでに二人がチフスで死んでしまった。ウラジヴォストークよりはるかシベリア奥地のハバロフスクやチタ、さらにバイカル湖のかなたのイルクーツクの女郎屋に流れて行った娘も少なくない。中国人の金持に仕切られて妾になっているものは幸運なほうだった。中には北海の寒村で阿片中毒のまま、行方が知れなくなってしまった娘もいる。

染乃はこれまでに何度となく、ロシアの商人や中国人の富豪たちから仕切つてやろうという申出をうけていた。へ仕切るゝとは、内地でいうへ身請けゝのことである。中国人やロシア人の中には、人間的にも信頼でき、金放れもよく、そういった日本人の女を自分の財産のように大切に

扱ってくれる客が少なくなかった。むしろ、外地へ流れて来ている日本人の男たちより、はるかに度量の大きな人間がいるようだった。種々雑多な男たちの相手をつとめて当てのない日々を過すより、彼らの申出を受けて安定した生活に入るほうが、どれほど楽かも知れないのだ。このヴラジヴォストークだけで、中国人に仕切られている日本人の女たちは三百人以上もいるという噂だった。

だが、染乃は、かたくなに仕切られることをこばみ通してきている。彼女のいる秀月楼の主人などは、染乃のそういった態度がどうしても解せないらしく、ひよっとすると何か隠された任務を持った軍部とつながりのある女ではあるまいかと、薄気味悪く思っている様子だった。当時は、中国、ロシア、日本などさまざまな軍事探偵や、特務組織の人間が、ヴラジヴォストークを中心に、暗躍を続けていたからである。そして、そのような国家対国家の、政治外交の対立の網目をぬって、日本のいわゆる「へ娘子軍」が、外地のいたるところに進出しつつある時代だった。「へ娘子軍」とは、明治二十年代から大正のはじめにかけて、日清・日露の二つの大戦を間にはさみ、驚くほどの勢いで南洋と大陸へ送り出されて行った日本人娼婦の大群のことである。

中には自分から進んで密航して出稼ぎに渡った娘たちもあったが、大半は博徒や女衞ぜげんの甘言につられて、商品として輸出された貧農の娘たちだった。「へ娘子軍」の南方の基地はシンガポールであり、北方の玄関がヴラジヴォストークである。シンガポールを経て、マレー半島、スマトラ、ジャバ、ボルネオ、サイゴン、マニラ、そしてはるかヒマラヤ山麓からケープタウンにまで及ぶ驚くほどの版図はんどが、日本の娘たちの進出先となっていた。南方へ出て行く女たちの出身地は、か

いふ、きさんの伝統を持つ長崎、そして熊本、福岡など、九州勢がほとんどだった。

これに対して、ヴラジヴォストークから、シベリア、沿海州、北滿と、大陸を流れさまよう女たちには、北陸、東北出身の農家の娘たちも少なくなかった。

彼女らは、旅券なしで行けるハルビンまで送り出され、そこからロシア官憲を買収したり、偽の旅券を使ったりして、国境を越えた。

中には北陸の港から、密航船で日本海を渡る無謀な連中もいた。ヴラジヴォストークへ向う汽船で、ひそかに送り出された女たちの中には、石炭庫の中に閉じ込められ、その中で死んだ女たちも少なくない。染乃もそんな話を客から聞いたことがあった。

嵐に会って揺れ続ける船の石炭が崩れ落ち、その中で摩擦しあう石炭に肉を揉まれ、骨を砕かれ、腐ったかぼちゃのような肉塊となつてスコップの上にすくいあげられた娘たちの話を聞いて、染乃は激しく吐いたものだった。

染乃自身は、ヴラジヴォストークでも名の通った貿易商、松原太吉郎の店の従業員の一入という形で、正式に渡航した形をとらされている。もちろん、貿易商とは表向きの看板で、実際にはヴラジヴォストークにある女郎屋の経営者として、羽振りをきかせている男だった。

明治の初期、ヴラジヴォストークの街にはすでに四百人ちかい日本人が住んでいる。そのうち、女が三百人にのぼった。そしてその大半が娼婦として内地から輸出された娘たちだった。

明治の中期には、六軒の日本人商店と、六軒の女郎屋があり、ロシア人、中国人、欧米人などの客を相手に金を稼いでいた。

さらに日露戦争前になると、正式に領事館に届けられただけで、ヴラジヴォストーク在留の日本人婦人数は千五百人を越えている。そして、すでに日本へ娘子軍の波は、シベリアの目ぼしい町には、ほとんど達していたと見られる。資料によれば、当時のシベリア大陸における日本人の娼婦の数は、およそ次の通りであった。

ハバロフスク	一三五
ブラゴヴェシチエスク	一三一
ニコラエフスク	一〇一
チタ	六五
ノヴォキエフスキー	三〇
イマン	二九
イグナーチノ	二八
ストレチェンスク	二五
ヴェルフネヴァージンスク	一三
ゼーヤ	一三
ラズードリノエ	一二
ネルチンスク	一〇
ガイダロフカ	六

これ以外に正式の旅券を持たず、密航させられた女たちの数は、相当のものであろう。すでに日露戦争以前に、日本の娼婦たちはシベリア大陸の奥深く送り込まれて、内地に残した貧しい父母兄弟に営々とその肉体を売って得た金を送り続けていたのだった。その当時の風俗を描いた文章の一部を見ても、そういった女たちの生態がうかがわれる。

へ——大阪商船会社の鳳山丸に乗り込んだ。初航海のこととて波止場はことのほか賑わしい。甲板に出てみると、揃いのゆかたを着て揃いの日傘をさした女が二十人ばかり棧橋を通っている。

先頭に洋服姿の若い男が立って、これと並んで友禅縮緬ちりめんの派手なのを着た女が歩く。聞けばヴラジヴォストックの女郎屋の亭主とその妾。

あとに従う二十余人は自分の店の女郎だという。これだけ聞いても痰でも吐きかけてやりたくなるが、今日しもこの男が日本へ立つというので、その店の女郎に揃いのゆかた、揃いの日傘で愛妾と共に見送らせたところ、と聞くにいたっては呆れてものがいわれぬ。

およそ人間恥を知らぬ禽獣。恥を名誉と心得るにいたってはムシケラ（本字で書く価がないから仮名にする）、こんなやつがヴラジヴォストック辺で幅をきかせているようでは戦勝国もなにもあるものかい。

へ峰月という軒燈の出ている三十三番屋敷を探し出す。雨風に晒された粗末な板囲いの家々が、恥辱と不醇とを卑下するように暗い星空の下にうずくまっている。うちみたところ、およそ十六、七人はおったろう。広い三十坪もあるパーロアに、いわゆるバルダックの群れは賑やかに店を張っていた。

モスリンか何かの美しい長衣を着た女が帽子をあみだにかぶり、さすがきまり悪げに出て行くロシア人を追いかけざま、軽く背を打って、さようならピョートル・ルシダニア、などと言っている。隅のほうに、せいぜい十二、三ぐらいにしか見えない妓が、短い真紅のコクタを着て、髷ぶかいロシア兵の膝の上に乗っかかり甘えている。奥のほうでは五、六人の女が二人ずつ一組となつて、手と手を組み合せつつ、鋭いバラライカの調音に足を合わせて、なんだかわけのわからない俗謡を歌いながら往来している。

よし子という女はすぐ知れた。これが天草で生れ、博多で左襟をとり、ウラジオストックでバラライカを弾いている女であろうか、と疑われるほどはきはきした東京弁。書架にはドストエフスキ一の罪と罰があった。

——米窪太刀雄著「マドロスの悲哀」——

へ——クラブは日本人街にあり。一街ほとんど日本人の貸座敷よりなる。売春婦の数、百五、六

十人、日本人街はかくの如くして売春婦により代表せらる。幅およそ十間、長さ四、五町、中央馬車道を通じ、その左右には多少の潤葉樹を植えたり。貸座敷の建物はすべてロシア風なる亜鉛屋根の平家にて、長方形の家屋いく棟よりなり、窓はまた道路に面して開けるもの少なからず。

(中略)

あるいは三人、あるいは五人、衣の色のさまざまにうち混りて、入口の弓形の下に立つもの、広間を徘徊せるもの、カーテンをかかげてその彩色せる窓より顔を出すもの、側廊に立ちて植木の葉越しに街路を眺むるもの、その七分どおりは水色・淡紅色・樺色・納戸のロシア更紗の洋服を着たるに、髪は赤熊シベリヤといえるに結いたる、或は桃割れにしたる、なかには束髪なるもありて、異種異様の風采ふうさいまず人を驚かしむるが客待ち顔に、静かに暮るるシベリアのたそがれをただ無心にうち興ずるめり。

夜に入りて車馬ようやく多きを加え、徘徊せるもの露人あり支那人あり。空には水蒸気低く迷い、十二日の月、夢よりも淡く、まさにこれ烟霞青楼を籠むるの処、娼婦が声を合わして無心に唄いつる長崎あたりの漁歌、一種の哀調をなして寥廓に響き来たる、幽婉より人の腸を断つもの、危坐一夜東方の客、潜々として涙くだること数行

——菊池幽芳著「日本海周遊記」——

染乃が、北前の徹に印をつかせられた前借書によって、このヴラジヴォストークの港町で有名な秀月楼に送り込まれたのも、そのようなへ娘子軍の一人としてである。

ただ、染乃の場合は、九州や北陸の貧農の娘たちと違い、商品としては飛び切りの一級品として扱われていた。金沢の東廊の若手第一とうたわれた美貌は、これまでの運命の転変の中で少しもおとろえず、むしろ二十代の半ばに達した彼女に一種の凄艶な陰翳^{いんえい}をくわえて、どこか虚無的な冴えた雰囲気と、何かを黙って耐え続けている女の内面的な高貴ささえも感じさせるのだった。

最初のころ、秀月楼の経営者、松原太吉郎は、そんな染乃の美しさに驚いたらしく、しきりに自分の妾にならないかと口説いたものだった。夜毎に変わる外国人の相手をするより、自分の女になって、行く行くは一軒の店をまかせるから、日本人相手の待合でもやってはどうか、とすすめたのである。

だが、染乃は黙って首を振るだけだった。彼女はすでにイワノフと機一郎を裏切った以上、もう一生どのような男ともかわり合いを持つまいと心に決めていたからである。そして、自分の人生を、人間の意思を超えた何かに、神とも仏ともわからぬが、そのような運命の手にすっかりゆだねてしまう気持になっていた。このまま異国でシベリアの果てに流れさまよい、末はむしばまれた肉体を雪に埋めて朽ちはてようとも、それが自分の宿命であるなら、それを甘んじて受け入れようという、冷えびえとした覚悟のようなものが定まっていたのである。

そして、そんな染乃の一種、不思議な静かさは、女を漁りに来る外国の男たちに特別の関心と驚きをあたえたらしかった。

染乃はこの街でも、最も高価な娼婦の一人とされていた。客たちは単に性欲のはけ口としての

女ではなく、染乃に或る尊敬と讚美の念を抱いて通ってくるように見えた。経営者の松原太吉郎も、そんな染乃に、出来るだけ良い客を選んであてがい、彼女を酷使することをさけていた。その事が結局は自分にとって利益になると気づいたからである。

中国人の中には、染乃の冷えた心をふと和やかにするような、優しく寛容な大人もいた。自分の丹精した小鳥を染乃に贈ったり、美しい詩文をつらねて彼女をたえたたりする富豪の子弟もいた。また、ロシア人の客の中には、染乃の気持の動きや、ひそかにかくしている悲しみを手に取るように感じ取って、涙ぐみながらなぐさめてくれる老人もいた。だが、染乃はロシア人の客を余り好まなかった。それは彼女の心の底で、絶えずイワーノフの事が想い出されるからだった。

それらの外国人たちにくらべると、日本の貿易商や、軍部のお偉方たちは、あまりにも男の欲望をむき出しにした動物的な存在だった。染乃はどんなに松原太吉郎が頼んでも、おどしても、決して日本人の客を取ろうとはしなかった。

ヴラジヴォストークの花街で、秀月の春太郎といえは、男たちにとって一種の伝説中の女のようになっていた。ロシア人たちは、彼女を、ヘベリョースカと名づけて、彼ら同士で染乃の事を話す時は、そう呼ぶのだった。

ヘベリョースカとは、白樺を意味するロシア語、ヘベリョーザの愛称である。この言葉は、ロシア式の花言葉で言えば、ロシア娘の象徴であり、また処女の端正さ、純潔、優しさ、などを意味している。娼婦である染乃のうちに、そのような何かを感じ取ったロシア人たちの感受性は、粗野な日本人たちには見出すことの出来ないものだった。

染乃は、あの、人を蔑^{さげす}みの目で見る故国をはなれて、はじめて或る種の安心感をおぼえるようになってきていた。夜毎に異なった男と肌を合わせる淪落の生き方にも、心を決めてしまえばそれなりの人生はあるような気がする。そして、あの機一郎のために、自分は進んでここへ来たのだ、という氣持が、彼女の支えになつてもいたし、また、イワーノフに対する贖^{しよくざい}罪の意識も心の底にあつたのかも知れない。自分をより一層みじめな、そして低い底の底まで貶^{おとし}めることが、誠実なイワーノフに対して少しでも贖^{つぐな}いになるのだと、染乃は感じていたのである。

今の染乃にとって、機一郎も、北前の徹も、石河原大尉も、そしてあの屈辱の日々も、ぼうつと遠くへかすんで、遠い世界のことのうに思われるのだった。来しかたは遙かに遠く、そしてこれから先の未来も運命にまかせて、染乃はただぼんやりとシベリアの夕風にひるがえるポプラの若葉を眺めている。

すでに街には女や男の嬌声と、夜の世界が開く直前の活気が漂いはじめていた。どこかでロシア人の弾くバラライカの哀愁に満ちたメロディが流れてくる。

染乃はうっとりとその音色にきき入っていた。イワーノフはどこでどう生きているだろう、と、ふと思った。

それは、戦後恐慌の打開を外部へ求めようとして、日本帝国が韓国併合の決意を固めつつあった明治四十二年の春だった。

その晩、染乃の部屋に上った客は、中国人の周という若い男だった。

二十七か、八歳ぐらいだろう。黒衣の似合う、蒼白い顔のいっふう変った客である。一月に一度か二月に一度、使いの者をよこして染乃を予約しておいて訪ねてくる客だった。長髪が額にかかるのを小指でかきあげながら、切れ長の鋭い目を半分閉じるようにして巧みな日本語を喋った。痩せて、無駄な肉のない、鋼鉄のように引き緊った体をしていた。彼が服の内側に、いつも大型の拳銃をひそめているのに染乃は気づいていた。

「私が何をしている人間か、ききたいか」

と、彼が一度、何かのはずみに言ったことがある。

「いいえ」と、染乃は首を振った。

「そうか。作り話をしないですむ。ありがたい」

と、周は言い、染乃を引き寄せて、しなやかな脚をからめてきたのだ。

「おまえは不思議な女だな」

彼は染乃の体をはなした時に呟くように言った。